

健康情報

千葉県医師会
健康教育委員会



低温やけど(熱傷)

千葉県医師会健康教育委員会

皮膚科委員 児島孝行 医師

冬になると、湯たんばやあんか、電熱器などの暖房器具を使用する機会が多くなりますが、それに伴ってやけど(熱傷)の危険度・頻度も高まってきます。今回はこの中で見過ごされがちな、あるいは軽く考えられがちな低温やけどについて解説したいと思います。

一般的にやけどは高温の液体、固体、炎などに皮膚がさらされて発症しますが、意外にも40〜55度位のそれ程高くない温度でも長時間加熱されることでやけどとなってしまうます。これを低温やけど(熱傷)といいます。さらに圧迫が加わると血流による熱の放散が妨げられるのでより深く障害されます。

また糖尿病や脳血管障害による知覚麻痺のある場合、睡眠剤服用者、泥酔者などでは同一部位が長時間熱源にさらされる傾向があり、思いのほか深いやけどとなり、長期間治らずしかも痕(瘢痕)が残ることが多いので注意が必要です。やけどの症状、予後(治り具合・経過)は深さによって変わってきます。Ⅰ度熱傷は表皮熱傷ともよばれ、表皮のみの障害で発赤を生じますが、2〜3日で治癒します。Ⅱ度熱傷は真皮に達するもので浅層と深層に分けられます。浅層では水泡ができ、痛みが強いことが多いのですが、深層やさらに進んで、皮下組織まで障害が及ぶⅢ度熱傷になると、かえって痛みはなくなり、水泡も

できず、焦げて白くあるいは黒く乾固した状態になり、一見軽症あるいは治癒した状態と勘違いすることもあります。そして数週間たつてから初めて深く潰瘍(かいよう)になっていることに気づきあわてることにもなります。こうなると瘢痕、ケロイドを残し手術が必要になることもあります。やけどの深さ判定は専門医でもしばらく経過をみないとわかりません。

やけどの治療は軟膏療法、手術療法などがありますが、まずは冷水で冷やし医療機関を受診して下さい。30分位、指先、脚などでは1時間位を目安に冷やして下さい。油など自己流の軟膏類をつけるとかえって悪化させることもあります。細菌感染が起きたり、糖尿病があつたりすると深く悪化することがあり注意が必要です。先に述べましたように低温やけどは意外と深いことが多いのでなるべく早期に皮膚科専門医を受診して下さい。

